

アユの産卵場や漁場の造成に関するマニュアル等を作成しました

アユは夏の味覚として、また、河川での釣りの対象種として広く県民に親しまれています。近年、漁獲量が減少していることから、資源回復に向けて稚アユの放流やカワウの食害対策など様々な対策が実施されています。水産研究所では、新たにアユの産卵環境や生息環境を改善する試験に取り組み、マニュアルや事例集を作成したので紹介します。

資源回復には天然アユの増大が重要です。アユは、秋に浮石（川底に埋没していない石）状態の小石に産卵しますが、土砂の堆積等によって石の隙間が埋まると産卵環境が悪化してしまいます。産卵場造成は、産卵環境を人の手で整備することで、良好な産卵場所が広がり、仔アユ（ふ化直後のアユ）の増大に繋がります。作成したマニュアルでは、造成の作業手順や留意事項を示すとともに、河川ごとの事例を紹介しています（図1）。

天然アユは春になると、海から河川をそ上し、夏の間、河川で成育します。また、この時期には、人工的に生産された稚アユが県内各地で放流されます。近年の漁獲量減少は、上流からの土砂供給の変化等に伴う巨石（長径25cm以上の石）や浮石の割合の低下が一因とされ、石の敷設や河床耕うんといった川底の整備はその課題を改善する取組です。作成した事例集では、石の敷設場所の選定や配置方法などの事例を紹介しています（図2）。

今後、マニュアル等を周知し、取組の拡大を図るとともに、内水面漁協への現地指導や効果調査等の支援を行います。また、各地の取組事例の検証を行いながら、より効果的な手法を確立し、様々な資源保護対策を複合的に実施することで、漁獲量の回復を実現したいと考えています。岡山の豊かな川の復活に向けて、調査研究を続けていきます。（海面・内水面増殖研究室：山下）



図1 産卵場造成マニュアルとアユの産卵に適した環境（右上）および産着卵（右下）



図2 アユの漁場づくりの事例集と整備後の漁場（右上）および生息アユ（右下）